

附子剤の使い方(乾姜とその比率)

責任者:田原 英一

コメンテーター:三瀧 忠道

高齢化やストレス社会により、裏寒の存在が無視できなくなっています。当科では裏寒を有する難治性の疾患に対し、附子(烏頭)剤を乾姜との比率を意識しつつ応用してきました。附子・烏頭は一気に温めるには有用ですが、本当の冷えを治療するには乾姜の存在が必要です。比較的表面的な冷えを取っていく桂枝加朮附湯等や太陰病期の方剤である八味地黄丸が有名ですが、煎じ薬でしか使われない附子粳米湯、▪ 苡附子敗醬散、陰実証の方剤としての大黃附子湯、附子瀉心湯や金匱要略収載の赤丸、烏頭湯、烏頭桂枝湯と個性派揃いです。さらには少陰病期の麻黄附子細辛湯、真武湯等から厥陰病に入っていく、四逆湯、茯苓四逆湯、通脉四逆湯等があります。四逆輩は比率により無限ともいえる変化があり、当日は時間の許す限りその適否と具体的な導入、増量、減量、加減法に関して、乾姜との比率を念頭においた当科での経験を余す所なくお伝えする所存です。